楊心流の易法について

――楊心流研究（其の二）――

長谷川　哲郎

日本の民族思想の中に流るる儒教思想の中で易経の思想があるが、江戸時代における易経思想は当時の社会思想の表面的にも又内面的にも根深いものがあった。武術理論に限らず、各種の技術を伝える流派と稱したものの理論付けには、易経の陰陽説、或いは五行説等が多彩に用いられているようである。

生活科学の未分化の時代に、人間の手の届かない不思議な自然現象の中で生きて行く不安定な人間の気持が、理屈は通らなくても何等かの自然の法則の中に自分を置きたい、安心感を得たいという欲求が、偶像宗教に救いを求める事と同じ心理で、易経理論が当時の人々の生活の中に解け込んだのも肯ける事である。

楊心流の秘伝として伝えられた「易法」に関するこの稿の内容は、現代社会の普通の考え方では矛盾だらけの、理解に苦しむ事ばかりである。而し立場を変えて考えれば、この様な理解に苦しむ理論にたよらなければ生きて行けなかった、過去の社会を画き出しているこの記録を通して、我々は当時の社会の民度或いは文化水準を窺う事の出来る資料として、価値ずける事が出来るのではないであろうか。

易経の陰陽説、五行説の概略を國語辞典より引用付記し、この稿を讀まれる方への参考にしたい。

○陰陽説

中国古代の易学から生じた思想であり、宇宙間の万物の相対する二つのものを、陽と陰の気に夫々属するものと考えた。この稿に関係するものをひろって見ると、天地、日月、男女、吉凶、昼夜、上下、前後、左右、剛柔等である。

○五行説

陰陽説と同じく中国古代の思想で、陰陽説を更に複雑化したものである。五行とは木火土金水の五つであり、これ等は宇宙間を流れ巡って、万物を無限に変化させるエネルギーであるとした。そしてこの五行は天地人の間に互に相互関係を持つと考えた。例えば木火土金水の五つの惑星は、地上に現われる木火土金水となり、人間の上に現われると、仁義礼智信の五徳となり、木星に異変がおこると、地上の木や人間の仁の徳に影響を与えるという考え方である。

○陰陽五行説

陰陽説と五行説が結びついたもので、陰陽の二気は五行の基礎とされ、純粋な陰気から水が生じ、陰気の多いものが金であり、純粋な陽気から火が生じ、陽気の多いものが木であり、陽気の平均したものが土であるとした。天地人の三者間に相関関係を持つとして、君主の道徳の善悪は自然現象に影響するという事から、一種の道徳学説ともなり、又十干、十二支とも結合して、天文や暦数に関係を持ち、更に病気の原因もこれによって推究する等、一種の医学にもなった。

○十干、十二支

中国殷代から用いられたもので、一ヶ月を上中下旬に三分し、一旬の十日間につけた符号であったが、後文字が出来た時符号に似た文字を当てたものという。従って最初は日を教える言葉に過ぎなかったものが、陰陽五行説が起ると木火土金水の五行を、夫々兄（え）（陽と剛の性質を持つ）と弟（と）（陰と柔の性質を持つ）に配当した。

第一章　陰陽胴釈門

天人地、胴を釈くの理は人間の五臓六腑、骨、筋肉を寸尺として、以って禁穴清穴を知るべし。此れを以って陰を知り時を以って陽を知る。十二時を立て干支（えと）を順（一天より繰る）と逆（暮六つより繰る）に繰るべし。陽の時は順、陰の時は逆に繰るべし。人間の体内の陰陽の巡る所を指し陰と陽とに十二時を立て、一切の急病或いは生死共にその時の日時を考えて、その日の死期を知るを立つべし。而して人間の死息性息は陰陽の死期を知るに従い、殺活共に不経、有経のものなり、ここに五臓六腑和合し以って月は日の時を待ち請うて総数に止る。火は水の時を待ち請うて上述に止る。七陽六陰にて五臓に経絡を巡らし、六腑は五臓の性を以って月日（陰陽）の経絡を満たすなり。人間は左に陽を請いて右に陰を請くる。陰により陽を痛むる時は陰の返しなり。陰を痛むる時は総て禁穴を痛めんとする日（陽）を助けて月（陰）を痛むる故なり。即陽の発る時は陰自から陽に満つるに、偏えに左の経を助くべし。陽を痛むる時は則陰発る時なり。陽自から陰に満ち陰陽和合して経絡順環し気経満つるといへども、陽痛む時は陰これを助け、陰痛むときは陽これを助く。陰は陽を請うて時を待つ故、総て陽経を助くべし。昼夜共に時あって気血止まり、又巡環する事二十四度なり、昼夜和して十二度なり。総て人間の息脈両道は一日一夜に一万三千五百度、これは阿息運息の常なり。四季の時節に応じ到って、その仁性息脈に不同ある故に水火の理を以ってす。昼夜共に十二時に刻の陰陽を刻み百刻に満つ。又性息を止むる時の手足の脈は一時に千百七十五度なり。又急病の息脈は総て一日一夜に一万四千百度なり。常にこれは五臓六腑を痛むる時なり。経絡止まって性気疲れ死ぬる時は、息脈、陰は陰に止まって、息腑神父共に破れて吐息出て命即座に滅る故に、吐息出る時は胸を固めて、松風、村雨を施す間腰を柔らかに固むべし。これを人性活伝の大事と心得べし。この流を学ぶ者誠に本心を明らかにして、真心（信心）を持つべき事極秘事大事の義なり。欽

ずべし。又性息止まって死を待つ時は十二時の陰陽を繰りて、三時迄に死ぬる事なり。経絡止まりても神父滅る事なし。息脈は三時に三千五百二十五度なり。これは死して気経及び五臓の乱るる故なり。刻は三時に二十四刻九分九厘九毛九発なり。三時を過ぎて後は人は性息し難し。これによって禁穴の当たりには即座に生かしの口伝あり。少し風を誘うべし。若し殺し捨てにしてその座を立ち去る時は、一時の刻積りて性息の機少し。雷公えの条所え心付くべき事口伝あり。これは性息の風を誘うなり。一時の内に性息の風を誘うべし。心活常に六根の禁穴を当て、七ヶ所の殺を当て、陰穴陽穴を助け、十二時を順と逆に操りてその痛所を知るべし。昼夜共に陰陽和合す。死期を知るに大事あり。その痛所を改めて十二時の陰陽の経を繰るべし。経水発し又止むに気をつくべし。

第二章　乾坤陰陽の大事

天地陰陽の和合は、陽は満ち陰は開く時なり。

乾の陽は、卯辰巳午未申の時にして、この陽経の繰り方は卯の時に陽と陰和合する故、卯の時より繰り始むるなり。陽六分陰四分なり。

坤の陰は、酉戌亥子丑寅の時にして、この陰経の繰り方は酉の時に陰と陽和合する故、酉の時より繰り始むるなり。陰六分陽四分なり。

乾の陽に当たる時、昼は陽気発する故上より下へ順に繰るなり。陽六分にて陰四分なり、陽の性は進み陰の性はかくる。夜は陰気発する故下より上へ逆に繰るなり。陰六分陽四分なり。陰の性分盛んなる故陽はかくるるなり。

坤の陰に当る時、昼は陰気治まる故下より上に逆に繰るべし。夜は陽性治まる故上より下に順に繰るべし。

乾坤、陰陽、順逆の繰り様斯くの如くなるべし。陽は満ちて開き治まり、陰は治まりて開く。

○　時の陰陽を知り体治様の事

昼六時より夜六時まで十二時の間、時の陰陽を繰りて心中に持つべき事大事の義なり。急病によって死する者の身体の治め様、寝せ様は、陽の時に当たる時は男女共に陰の方（左）を下にして寝すべし。陰の時に当たる時は男女共に陽の方（右）を下にして寝すべし。誠に殺活の時には、この陰陽を用ふべき事極秘事大事の義なり。陰を殺し陽を助け、又陽を殺し陰を助くべきに大事あり。心に天地陰陽或いは死期の順逆を知り、体の治様、身の固め様に心すべきなり。死期の順逆を知るを以って生かすべき大事はよく修学し、順の心中にそうべし。

○　人の死期を知るべき事

人、生死の因性死期に陰陽の時期あるを知りて治様心すべきなり。人の一切の急病、横死、横難の際、先ず死期を繰りて治様を計るべし。死期を繰りたる後天地を請いて身体を治むべし。尤も天地を請うには男は天に向い、女は地に向って治むべし。

急病、横死、横難にて死期に臨む者は、日の陰陽の死期（昼夜、時、血）に従い天地を請い心得て身体を治め、殺活共に死期を知るの大事あるを心得べし。

(イ)　日の死期は月の

上旬においては　一二九十は子午卯酉なり
　　三四五　は丑未辰戌なり

六七八　は寅申巳亥なり
一二九十は丑未辰戌なり
中旬においては
三四五　は寅申巳亥なり
六七八　は子午卯酉なり
一二九十は寅申巳亥なり
下旬においては
三四五　は子午卯酉なり
六七八　は丑未辰戌なり

この十二支及び日、共に心中に持つべき大事の義なり。子の日に当たる日は年内に毎月上中下三旬の間にあり。

(ロ) 時の死期　一日の内昼夜の境の前後に死期あるを知るべし。

天門（陽）　朝（後半）

辰巳の間、これは昼の内毎日三百六十四日。

地門（陰）　夜（後半）

子丑の間毎夜、夜の内　毎夜三百六十四日

(ハ) 陰陽の死期

（暁）寅の時　（昏）寅の時の死期を知るべきなり

(ニ) 血の死期　六根の内二十二時を立て、陰陽を和合して、半調に十二時の所に当たる時、陽を指す時なり。

(ホ) 四季の死期　一年に陰陽和合の季は四度なり。四季の土用なり。天門地門の開く時陰陽和合して満つるなり。

○　仁性順逆の大事

陰陽の時刻十二時、子の性経、性絡は丙午の刻、昼の九時は陽、この刻より陽性下り庚酉の刻に治る。庚酉の刻は暮六時この刻に陽性止まって治る。酉の時より陰に和合す。夜は陰六分陽四分、昼は陽六分陰四分なり。壬子の刻夜九時は陰この刻より陰性下る申卯の刻に治る。朝六時申卯の刻に陰止まって治る。

○　仁性息脈陰陽の大事

陽脈六時の人息六千七百五十息、常の人息息脈午未申三時の刻は則二十四刻九分九厘九毛九発、陽は丙午より下りて庚酉の刻に止まる。陰より発し上り陽に満つ。陰脈六時の人息は六千七百五十息。常の人息一時の息脈千百二十五度。常の一時の刻は八刻三分三厘三毛三発。陰は壬子に下る。申卯の刻に止まって陽より発して上り陰は満つる。以心伝心に持つべきものなり。

第三章　九曜星の大事

○　九曜星

金曜星（肺）壬子性、水色、黒、北、腎

土曜星（脾）癸丑

木曜星（肝）辰寅

火曜日（心）（甲卯乙辰性、木色、青、東、肝

水曜星（腎）巽巳

日曜星（小腸 膀胱）（酉 丁 午 未性、火色、赤、南

計都星　坤申

羅候星（大腸）（庚 辛 酉 戌性、金色、白、西、肺

日曜星（膽 命門）乾炙時（腎 陽半→（肝 陽 西→（心 陰 陰→（肝 陰 陽陰

○　九曜星繰り様の事

上男は羅候星より繰り始むべし。

中男は金曜星より繰り始むべし。

下男は計都星より繰り始むべし。

上女は金曜星より繰り始むべし。

中女は計都星より繰り始むべし。

下女は羅候星より繰り始むべし。

右の通り皆順に操るなり。

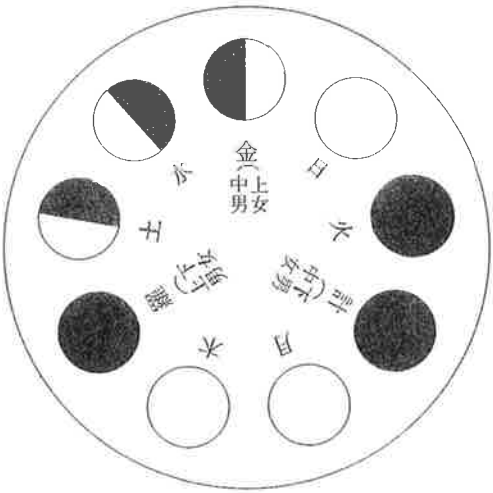
○　九曜の善悪　　(イ)　月の善悪

○　白は万吉　　●　黒は八万の悪

◐　左黒は正月より六月まで悪、七月より十二月まで吉。

◑　右黒は正月より六月まで吉、七月より十二月まで悪。

(ロ)　年の善悪



○　羅候星に当たる年は、よろず慎むべし。大きに悪星なり。来年羅候星に当たる年、即その前年は大事なり。故に羅候前というなり。旅に出れば口舌あり。とり分けて一四七十の月を慎むべし。

○　土曜星に当たる年は、家屋、舗に離るる事あり。海河を慎むべし。とりわけ三六九の月を慎むべし。

○　水曜星に当たる年は妖艶に口舌あり。又海河を慎むべし。水損する年なり。春秋は大事なり。

○　金曜星に当たる年は、金物にて命を失う事あり。又住所に苦労する事あり、五六の月を慎むべし。

○　火曜星に当たる年は、大きに悪し。殊に火を慎むべし。羅、計、火の三星は悪星なり。慎むべし。

○　計都星に当たる年は大きに悪し。来年この星に当たる年は、今年より前後三年悪し。殊に三四の月を慎むべし。

○　月曜星に当たる年は万吉。さりながら月のとがめあるべし。又は住所を去る事あり。信心に慎むべし。

○　木曜星に当たる年は万吉。さりながら木を切るべからず。主人に口舌あり。よくよく慎むべし。

右の通り九曜星繰り様の事上中下三段の性を知るべき事、則左にこれを記す。

寛永より天和三年まで六十年、中段の性なり。

貞享より寛保まで六十年、下段の性なり。

延享より六十年の間、上段の性なり。

秋山柔術の奥義　虎の巻　　日取りの秘伝

星の下に月あり。月に当たる星より日を右に順に数え、その当たりたる日の星の色にて「掛かり」の勝。「待ち」の負けを知るなり。

◑　半黒星「掛かり」の勝、「待ち」の負。

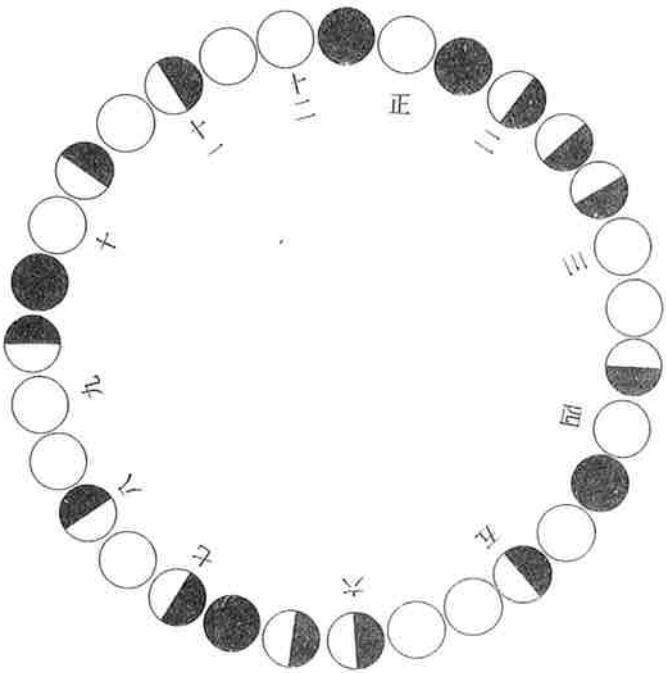
○　白星　「待ち」の勝。「掛かり」の負。

● 黒星　いむべし。日を後にすべし。日に向って掛かるべからず。（閏月は始めの月に准ずべきなり）

（註）伝に曰く但し中興よりこれを記す。

○　三月十八日半黒に当たる。屋島にて源氏「掛かり」の勝。
　平家「待ち」の負。

○　六月十二日明智と大閤秀吉との戦の時、秀吉「掛かり」
　の勝。明智光秀「待ち」の負。

　すべてこれに准ずべし。考え見るべし。これに不合と言う
事なし。考えて諸事の吉凶を知るべし。

秋山柔術日取の秘伝は昆沙門天日取りの秘法なり。